

---

**ハジメマシテ ダイキライ です**

restart

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハジメマシテ ダイキライ です

### 【Nコード】

N36100

### 【作者名】

restart

### 【あらすじ】

あるとき、捻くれ者の少年と、素直でおかしな少女が出会いました。

だれか、俺の話を聞いてくれないだろうか。

いやいや、無理しなくてもイヤってんなら別にいい。

俺はアンタを惹きつけるような話し上手でもなんでもないからね。立ち止まってくれてもそれは無駄な時間かもしれないんだ。

笑っちゃうよな。くだらない話なんだ。

たった、そう。

たった三分間だけの、話だ。

「

」

そして、彼女は笑って手を差し出した。

それはどこからどうみても可愛い女の子。俺の好みというわけでもないけど。そう、普通の少女だ。

きっと誰からでも好かれるのであろう、可愛い女の子。

その笑顔からは拒絶など知らないのだろうか、俺を信じて疑わないような、そんな笑顔。

ああ、君と俺は初対面だろうね。

だって俺は君みたいな可愛い子は初めて見たんだ。うん、そうに決まってるよ。

その間、僅か三秒。

「ああ、そう。うん。ハジメマシテ。」

手を握ることもせずに、俺は言葉だけを発した。両手は後ろに回した。

君の手なんて握ってあげないよって。

君は少しだけ不思議そうな顔をして手を引っ込める。そりゃあそう  
だ。握ってもらえないのに手なんて出しても意味ないさ。

俺は愛想笑いを浮かべる。

現在、十秒。

「君って、変わった子だね。」

次に口から飛び出したのはそれだ。

ああ、俺のほうが結構変わってる。

君はその顔を少しだけ歪めた。人差し指を唇にあてて、なにかを考  
えているようだった。

考えるのは俺の方かもしれないけど。

まだまだ、たった十五秒。

「そうかな？普通だと思うけどな。」

君は指を離すと、また笑顔でそう言った。

いやいや、結構かなり変わってる、かもしれない。

不思議な子。そう、不思議な子。

いきなり初対面の人に『変わってる』なんて言われたら、少しは気  
を悪くしそうなもんだけどな。

そんな様子、まるでない。

これで、やっと三十秒。

「俺は、君みたいな子は初めてだよ。うん、すごく変わってる。君、将来すごい変人になるかもね。」

君はそれでも笑った。

さもおかしそうに笑って、俺の事を見た。

なんだ？ なにか、おかしいことでも言ったかな。俺は。俺はいつでも真面目なのに。

まだ終わらない、四十秒。

「それはそれで、おもしろそうだね。私が変人になったら、どんな風になるんだろうね。」

そうだなあ、君が変人になったら、いま以上にずっと笑っているかもしれないね。それはそれで変人だ。

ああ、君は俺が君のことを馬鹿にしてるって気づかないのか？  
本当にすごく変わってるかもしれない。

君は俺の事を見て、まだまだずっとにこにこ笑ってる。

俺が次の言葉を発するのを待っているみたいだった。

一分。

「そうだね。きっと、誰も見れないくらい、とても無様だろうな。」

我ながらなかなかヒドイことを言っている。しょうがない、俺はそういう奴だ。

君はそれでも笑う。

こんなこと言っても、笑ってくれるのって、きっと君くらいだよ。  
そんな君が、俺は『だよ。』

「ひどい。初対面でそんなこと、普通言わないよ？」

『ひどい』なんて言っても、笑顔のままだ。

やっとなん分、一分三十秒。

「ひどいのは君の存在だよ。君はその無垢な瞳で、どれだけの人を傷つけてきたんだい？」

俺、最低。

わかってる。だってしょうがないよね。俺は俺だ。  
どれだけ捻くれてるのかわつてはなしかな？

君の顔が少しだけ、少しだけ醜く歪むのがわかる。

「無垢だよ。君って。」

続けた俺の言葉。

まるで、全てがわかつているような台詞だ。  
わかるわけがないけど。

この話、あと一分を切った。

「正直に言っよ。俺、君みたいな人がダイキライだよ。にこにこ笑  
ってさ、それだけで何とかなるとでも思ってたの？」

君の顔がもつと歪む。

可愛い顔が、その形を崩し、不安そうな顔で俺を見つめる。  
不思議な感じだ、俺がこれを歪めてると思うと。  
とても、不思議な感じだ。

あと、五十秒。

「どうして、そんなこと言うの？」

決まってるだろ。

変わらない声色で、君は言った。

それは、もしかしたらやつのことでしぼりだした言葉だったのか  
もしれない。

俺は君みたいなのが

『なんだ。

』なのに、何の理由がある？

とても、長い三十秒。

「俺が君の事、ダイキライだからだよ。」

君は、おかしいよ。

どうして、俺のこと、そんな目で見るの？

君の顔は、すっかり元の調子に戻る。

さっきまで醜く歪んでたというのに、今の一言で、すっかり戻って  
しまった。

「ダイキライ。そっか。私は君のこと、嫌いじゃないよ。」

にこにこ笑う。底無しの笑顔。  
気持ち悪い。

そっ、真面目に、思った。

「ふーん。本当に、変人だね。」

俺は、笑うことができなくなってた。

おかしい。

俺は、君なんて『

』だと、言ったのに。

どうして、君は、『

』と言わない？

そして、その五秒。

「だってね、私、思うよ。『ダイキライ』と『ダイスキ』は紙一重。君が、私のことを気にかけてくれるだけでも、嬉しいな。」

じゃあ私、用事あるから。また一緒に話せたら、嬉しいな。

「

そう言っで、どこかへ行ってしまった君。

あとの、一秒。

俺は、君の言葉を考えるだけで終わってしまった。

じゃあ、『ハジメマシテ』で、『ダイキライ』だったら。

また君と出会うとき。

俺は君の事。

『ダイスキ』なのかもしれない。

このたった三分間の話は、これで終わりだけれど。

俺はこの三分を、本当にたくさん考えた。

君を『ダイスキ』と思える日なんて来るとは思えない。



でも、また君と会えたら、俺はきっと、

『ああ、ダイキライな奴がいる』

って、言っ

きつと、すっげえいい顔で、

笑っちゃうんだろっな。

笑ってしまっただろっな。

俺は、君に負けてしまったんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3610o/>

---

ハジメマシテ ダイキライ です

2010年10月17日15時41分発行